

氏名(本籍)	ほり 堀	えい ぞう 栄 造	(熊本県)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2187号		
学位授与年月日	平成18年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	フッサールの現象学的還元の研究 - 1890年代から『イデーニ I』まで -		
主査	筑波大学教授		竹村喜一郎
副査	筑波大学教授	博士(文学)	河上正秀
副査	筑波大学教授	Dr.phil	谷川多佳子
副査	筑波大学教授	文学博士	笹澤豊

### 論文の内容の要旨

本論文は、E. フッサール(1859-1938)の現象学的還元の形成過程を、初期の1880年代から『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』(1913年。以下『イデーニ I』と略)にいたる八つの段階に分けて考察する。全体は六章から構成されている。

第一章<フッサールの哲学研究の出発点>は、初期フッサールの哲学を三つの段階に分け、それらと現象学的還元との関連について検討を加えている。第一節では、1887年から1891年にいたるフッサールの哲学研究の第一段階を、数学の基本概念を意識作用へ遡行して解明しようとする心理学主義的基礎づけの時期と捉え、そこでなされる意識対象としての概念と意識作用の相関の原初的研究、本来的(直観的)表象および非本来的(記号的)表象についての素朴な研究が、還元思想の前段階的意義を有することを明らかにしている。第二節では、1891年から1894年にいたる第二段階を、意識作用と概念(意味)と対象とを相互独立的に相関するものと捉える反心理学主義的心理学の時期と規定し、そのうち現象学的還元の下地となる直観と再現前化の統合可能性の研究、中立性変様の形成の下地となる代現と像表象の主題化、エポケーの下地となる単に志向的ということの研究、中立性変様の下地となる単なる表象の研究が還元思想の前段階としての意義を有することを明らかにしている。第三節では、1894年から1898年にいたるフッサールの哲学研究の第三段階が、反心理学主義的心理学から反心理学主義的イデア学への転換の時期と捉えられ、純粋空想概念形成の下地となる空想表象の研究、現象学的反省者に不可欠となる空想意識の自覚の研究が、還元思想の前段階としての意義を有することが明らかにされている。

第二章<『論理学研究』の哲学的課題の解決の限界と還元思想の萌芽の生成>においては1900/01年公刊の『論理学研究』において、反心理学主義的イデア学の樹立という哲学的目的が、内的意識に基づく内的知覚という哲学的反省によって達成されるが、それによって獲得されるイデアのレベルの認識論的本質、つまり志向的作用、志向的内容、志向の対象の相関という表象の本質的構造は、心理学の場合と同様に実在的次元に止まるという難点を持ち、その難点の克服を目指して生まれる性質変様と空想変様に関する研究が還元思想の萌芽の生成という意義をもつことが明らかにされる。

第三章<現象学的還元の着想>では、1904/05年時点のフッサールの哲学研究の第四段階において、現象

学的反省の實在的次元から非實在的次元への脱却が、内的時間意識の分析を介して獲得される空想における反省によって図られ、ゼーフェルト草稿などにおいて明確に現象学的還元の着想が展開されることが確認される。

第四章<現象学的反省の確立>において、フッサールの哲学研究展開の第五、第六、第七の諸段階が討究される。まず、1906/07年時点の第五段階においては、現象学的把握の顕在性から非顕在性への転換が目指され、哲学的反省方法が現象学的知覚から空想直観（現象学的準現前化）へ転換されて、現象学的反省の非實在的次元への完全な脱却が達成されることが明らかにされる。次いで1907年時点の第六段階においては、対象の存在的現象への現象学的還元の遂行によって、空想における反省の所産たる空想カプセル内の志向的作用と相関する志向的对象が存在性を具備した対象となり、自然的次元の世界経験の現象学的認識論の本質が真の現実として開示されるようになることが明らかにされている。更に、1908年時点の第七段階において、意味論的領域における現象学的還元が試みられ、述定対象を内含する範疇的对象への超越的对象の還元が遂行され、自然的次元の世界経験の超越論的現象化としての超越論的還元の可能性が開かれることが明らかにされる。

第五章<超越論的還元の形成>では、1908年12月頃から1913年の『イデーニ I』にいたるフッサールの哲学的発展の第八段階において、自然的次元から超越的次元への脱却が哲学的目的とされ、自然的次元と超越的次元を仕切る非顕在性変様系列によって支えられる、経験の立体的超越論化を基軸とする超越論的現象学的反省が形成され、世界経験をその超越論的基底として支える動機付けによって貫かれた純粹意識連関を真の現実として捉える脱現実化的現実化としての還元が実質的に遂行されることが明らかにされる。

第六章<現象学的還元の核心>においては、『イデーニ I』における超越論的現象学の諸契機を成す超越論的現象学的エポケー、中立性変様、中立性変様と現象学的還元との関係、形相的還元、形相的心理学（現象学的心理学）と超越論的現象学の具体的操作上の差異、超越論的現象学的還元を経た真の現実が解明される。

以上の考察を踏まえ、堀氏はおおよそ二つの結論を引き出している。一つは、超越論的現象学的還元は、真の現実としての實在的世界と意識の結びつきを超越論的主観性の世界構成的能作の所産として開示するために不可欠な哲学的方法であるという意義を有するということである。もう一つは、『イデーニ I』における現象学的還元は、デカルトの意識、ロックの内的知覚、ヒュームの虚構、更にはカントの超越論的哲学を基盤とした独自の超越論的哲学的内実を有しているという哲学史的意義を持っているということである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

フッサールの現象学的還元に関する研究は、少なくはないが、そのほとんどが『イデーニ I』あるいはそれ以後の時期を対象としており、フッサールの哲学的発展全体を視野に収めたものは極めて少ない。そうした研究状況の中で、堀氏の研究は、フッサール自身によって公表された著作、論文だけでなく、1980年前後から公刊されるようになった膨大な遺稿群を丹念に分析・検討し、初期から『イデーニ I』までのフッサールの還元に関する思想を八つの段階に分け、それぞれの段階の固有性を解明したところに独自性を有する。そのことを踏まえ、本論文の成果としては以下のような諸点が挙げられる。

第一は、フッサールの還元思想の核心が空想（Phantasie）あるいは空想における反省にあることを明確にしたことである。堀氏によると、空想に対するフッサールの着目は、1893/94年時点での表象の一種である像表象から始まり、以後空想表象として研究対象とされ、それが純粹空想として現象学的還元の中樞を成す。現象学的還元とは、フッサール自身によれば、「自然的態度の一般定立の徹底的変更」であるが、堀氏はこうした営為を空想における反省によって達成されるものとする。すなわち堀氏は、現象学的分析の対象

となる、内在的経験や世界経験の空想的に変様された世界を「空想カプセル」と呼び、現象学的反省を、現象学者が空想力を働かせて実在的現実を空想カプセルの中に詰め込むことと解し、そうすることによって実在的現実を脱却するとともに空想カプセルを外部から反省的に見ることが可能になると捉える。このような現象学的還元の見え方は、ユニークであり、独自の貢献といえる。

第二は、以上と関連して、『イデー I』にいたるフッサールの哲学的発展段階が明確に画定されるとともに、それぞれの段階の固有性が特定されるにいたったことである。旧来フッサールの哲学的発展に関しては、一般的に『論理学研究』に代表される前期、『イデー I』に代表される中期、『イデー I』以後の後期と漠然と三期に分けられて来たにすぎない。例外的な研究として堀氏がしばしば言及している P.J. ボサートのものがあるが、堀氏はボサートをはじめとする先行研究との厳密な対質を通じて自己の見解を提示しており、その主張内容はきわめて説得的である。

第三は、現象学的還元において枢要な位置を占める中立性変様の成立経緯が解明されたことである。中立性変様は、実在的現実に対する反省的まなざしの中立性を確保する作用を果たすものとして現象学的還元には不可欠のものであるが、その成立経緯は公刊されたフッサール自身の論著からは不明である。堀氏は、フッサールの未公開の遺稿の検討を通じて、フッサールが 1912 年 4 月時点において、現実的判断から単に想定することへの移行である思惟の変様と、おのおのの志向的体験からそれに対応する再生的体験への移行である再生的変様との差異を問題にしなが、それらの複合体として『イデー I』における中立性変様が構築されたことを論証している。こうした堀氏の研究は、フッサール研究の欠落部分を埋めるものとして高く評価されるものである。

第四は、フッサールの意味把握の変遷およびその哲学的意義に新たな照明を与えていることである。フッサールの意味理解には変化が見られ、一義的には捉えがたい。堀氏は 1908 年時点においてフッサールが、概念がその作用的側面のうちにもつ意味を現象学的〔phänologisch〕意味概念と規定し、これに対して相関的側面つまり構成された対象性の側面を現象学的〔phänomenologisch〕意味概念と規定していることに着目して、『論理学研究』におけるスペチェスとしての意味作用を現象学的意味概念、ノエシス-ノエマの相関におけるノエマ的側面を現象学的意味概念と捉え返している。このような意味規定はフッサールの叙述に基づくとはいえ、現象学の成立と意味把握の転換の相即性を解明することによって、フッサールの意味把握に対して新しい観点を導入したと評価される。

第五にフッサール現象学の哲学的意義の解明が挙げられる。堀氏は『イデー I』の哲学的意義を、真の現実を超越論的自我あるいは超越論的主観性の世界構成的能作として開示したことに求め、その開示の哲学的方法として超越論的現象学的還元を位置づけている。そこには超越論的現象学的還元が、デカルトの意識、ロックの内的知覚、ヒュームの虚構、カントの超越論的哲学といった近代哲学全体に含まれる諸難点を克服し、脱現実的現実化の方法として実在的現実を脱却して真の現実を把握することを可能にしたという哲学史的意義を持つことも評価されており、そうした評価は的確であると認められる。

その他にも、ここでは割愛するが、現象学理解に有意義な考察が多数展開されている。

上述の如く本論文は、従来の研究では十分に解明されなかったフッサールの還元思想の形成過程およびその意義に新たな光を投じたものとして高く評価される。とはいえ、本論文も幾つかの難点を免れているわけではない。第一に指摘されるのは、フッサールの還元に関する思想発展を八段階に区分することが妥当かという問題である。堀氏自身現象学的還元の中枢をなすものとして中立性変様を位置づけ、その成立を 1912 年 4 月以降に求めるなら、そのことは新たな段階を画するものとして位置づけられるべきである。第二には、フッサールの超越論的現象学の核心が超越論的主観性に帰されながら、超越論的主観性そのものに関するフッサールの記述のみが紹介され、堀氏独自の考察は展開されていないことが挙げられる。第三には、フッサールの哲学史的意義として近代哲学の限界の克服が挙げられても、それだけではフッサール自身は近代哲

学の枠内に留まるのではないか、という現象学に批判的な哲学的立場からの疑問あるいは異論に対する回答にはなりえない。第四には、達意とは言い難い叙述、多様な解釈を許す表現が散見され、読む者に無用な忍耐を強いることがある。第五には、先行研究との対質が多数の場面で行われているため、しばしば自説の固有な展開が妨げられ、論旨がかえって不明確になるという事態も見られる。

以上のようないくつかの難点が指摘されるとはいえ、そのことは本論文の本質的意義を損なうものではない。本論は、遺稿にまで視圏を広げ、フッサールの初期から『イデーン I』までその還元思想の形成・発展を詳細に検討した研究として、日本国内ばかりか、国際的な規模でみても大きな意義を持つ、極めて優秀で画期的な論文であり、十分に博士号に値する研究である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。